JANES ニュースレター

日本ナイル・エチオピア学会

No. 33-1
Dec. 2025

目次

■ 巻頭言
■ 前学会長によるふりかえり
■ 第 34 回日本ナイル・エチオピア学会学術大会 最優秀発表受賞者エッセイ
■ 活動紹介
■ 学会動向・会員の異動

巻頭言

日本ナイル・エチオピア学会との出会い

児玉 由佳　Yuka KODAMA
アジア経済研究所

アジア経済研究所に勤めてもはや 30 年を越えてしまった。入所当時、アジ研では、入ってから担当国を決めることが多く、研究所では誰もやっていないという理由で、私はエチオピアを担当することとなった。

それでどうすればいいのか当時上司だった南ア研究者の林晃司さんに伺うと、とりあえず福井勝義さんに連絡しなさいという、今思えば甚だ無責任なアドバイスをもらった。当時は、インターネットも黎明期で、E メールも限られた人しか使っていなかった。仕方ないので、私はとりあえず福井さんにいきなり電話をかけたのである。

その時の、福井さんの、明らかに不審なやつからの電話だと考えているとしか思えない、戸惑った声音は今も鮮明に覚えている。それでも、まずはナイル・エチオピア学会に入りなさいと勧められて、素直に入会したのだった。

初めて参加した学会は、実は報告はよく覚えていないのだが、夜は温泉地で、合宿のような部屋割りで知らない人達と同室となった。同じ部屋になった初対面の石原美奈子さんをアムハラ語の先生としてナンパしたのも良い思い出である。

この学会経由で知り合いになれた研究者も多く、とても感謝している。何らかの恩返しができればということで、今回会長を引き受けた。今はさまざまな形でネットワークを築くことができるが、学会の関係性も捨てたものではないと思う。微力ながら活発な研究交流に貢献できればと考えている。

写真
大家夫婦と若かりし頃の筆者。アムハラ州の調査村で（2004 年 2 月）

前学会長によるふりかえり

学会長になるのも悪くない

２期６年をふりかえって

田川 玄　Gen TAGAWA
広島市立大学

2019 年 4 月、京都大学の学術大会の際に開かれた評議員会にいつものようにお気楽に現れた私は、当時の会長重田眞義さんから「ちょっと話したいことがあるんや」と声をかけられました。その話が何か分からないままに評議員会がはじまると、重田さんがいきなり私を推薦し「会長になるのも悪くないで」というようなことを言うではないですか。翌日の総会で学会長というのは誰でもなれるのだという挨拶をしてしまったことは、今でも反省しています（その半分は全くうけなかったからですが）。コロナ禍もあり、それからまさかの 2 期 6 年。

さて、本学会は 1992 年に設立されましたが、私が会長の任にあったのは学会設立にご尽力された先生・先輩方がすでに第一線を退かれた、あるいは退きはじめようとしていた時期になります。2021 年に初代会長の河合雅雄先生が亡くなられました。河合先生の書かれた “Memories of Mr. Koichi Takashima” は、高島基金の原資を寄附してくださり、2000 年に逝去された共英製鋼の実質的創業者高島浩一さんへの追悼文であり、学会のホームページに掲載されています。この文章を読むと、河合先生や高島さんの高い志、卓越した行動力、強い情熱、そして時代の雰囲気と巡りあわせを感じます。また、独特な学会の成り立ちを伝えています。

そのような偉大な先達の賜物である学会をいかに継続させるか、副会長や幹事の皆さんと相談しながら方策を考えました。前任の重田さんによってはじめられたビザ手続き支援を引き継ぎ、学会誌をオンライン化し、学会の収支状況の改善を図り、研究大会のあり方を見直していきました。なかでも思い出深いのは、副会長の曽我さんと共英製鋼の高島秀一郎会長にご挨拶に伺い、大変ありがたいことに再度、ご寄附をいただいたことです。この訪問は大変に緊張しました。今という時代の巡りあわせと雰囲気を感じる経験でもありました。

最後に、お世話になったすべての方々にお礼を申しあげます。副会長の曽我亨さんと児玉由佳さん、総務幹事の村橋勲さん、会計幹事の佐藤靖明さん、ウェブサイト担当幹事の増田研さん、渉外幹事の金子守恵さんとは 2 期 6 年ごいっしょでした。そして、総務幹事補佐だった西真如さん、学会誌編集長の佐川徹さんと藤本武さん、ニュースレター編集長の有井晴香さんと松波康男さん。すべてのお名前をあげることができず申し訳ありません。みなさんのお陰で会長であることも意外に悪くはありませんでした。この限りにおいて学会長は誰でもなれるのです。

第34回日本ナイル・エチオピア学会学術大会
最優秀発表受賞者エッセイ

エチオピア・オロミア州の中世サカテ遺跡の構成要素の検討

現地踏査および衛星画像分析から探る遺跡概要

遠藤 仁　Hitoshi ENDO
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
大東文化大学東洋研究所

2023年に確認した、エチオピア・オロミア州西ハラルゲ県のイスラーム関連遺跡群、とりわけサカテ遺跡の発見は私の研究活動に大きな転機をもたらした。本学会において、2年連続で最優秀発表賞を賜り、これまで面識のなかった先生方からも声をかけていただけるようになり、研究活動の幅が大きく変化したことを実感している。

私がエチオピアで初のフィールドワークを行ったのが上記の調査であり、いきなり大当たりを引き、同地域での考古学調査の大いなる可能性を感じている。私はエチオピア調査では新人であるが、考古学研究者としては20年以上の経験があり、これまでは日本や南アジア、西アジア、北アフリカなどで遺跡や、現在の物質文化の民族考古学的調査を行ってきた。その中でも石製ビーズを主要な研究対象として、遺跡の出土資料だけではなく現在の職人に関しても調査を行ってきた。その石製ビーズの調査が、エチオピアへの関心を抱く最初のきっかけとなった。

インド西部グジャラート地方には、インド洋交易の拠点となった貿易港がいくつか存在する。その中の1つにカンバート（Khambhat）という街がある。英領インド帝国期にはカンベイ（Cambay）の名前で知られたこの街は、サウラーシュトラ半島の東の付根にある。現在は世界有数の潮汐差のため現在は港が埋まり、貿易港としての往時の面影を感じることができない寂れた街である。しかし、少なくとも中世以降続いている石製ビーズをはじめとする石製工芸品生産拠点としての機能は維持している。この街の石製工芸品は、インドでも有数の質と生産量を誇り、それを担うのはアキーク・ワーラー（直訳するとメノウ屋）と呼ばれるヒンドゥー教徒とイスラーム教徒が混在した職人集団である。アキーク・ワーラーは宗教を問わず、バーワー・ゴール（Bāvā / Bābā Gōr）という聖人を信仰している（写真1）。バーワー・ゴールは、中世（おそらく15世紀頃）にアビシニアから来たとされるスーフィーの聖人で、彼は石製工芸品の原石となる準貴石の知識をもたらしたという。また、バーワー・ゴールと同じくアビシニアに出自をもつとされるスィーディー（Sīdī / Siddi：パキスタンに居住している同系統の集団はハブシー（Habshī）と呼ばれている）という民族集団が、グジャラート地方のラタンプル（Ratanpur）という場所で準貴石の原石の採掘に従事している。私はカンバートで調査を10年以上継続して行っており、スィーディーの人々とも交流をもっている。彼らは独自の言語を維持していないが、独特なダンスやボディペイントなど、南アジアの周辺では見られない独自の文化要素や身体的特徴を持っている（写真2）。

スィーディーやバーワー・ゴールに関してはいくつかの研究があり、彼らは15世紀頃に商人や傭兵、奴隷として東アフリカから来て南アジアに定着した

人々で、現在もインドやパキスタンに少数居住しているという。しかし、スィーディーの一部が準貴石の採掘に従事している経緯や、バーワー・ゴールの伝承に関しては不明なことが多い。考古学的には少なくとも紀元前3千年紀には、グジャラート地方で準貴石の採掘は行われていたことがわかっているため、バーワー・ゴールが準貴石の情報をもたらしたという伝承の学術的根拠は低い。しかし、伝承の存在やスィーディーの人々が採掘技術を持っていることから、私はアビシニアには石製ビーズ生産や準貴石の採掘に関して、現在も知識や技術を保持している集団がいるのでは、と興味を抱いた。そこで、アビシニア＝エチオピアということで主に石製ビーズに絞り、考古学や人類学的研究の有無を調べたものの、管見の限り南アジアと比較できるような情報を見つけることができなかった。そこで、エチオピアで現地調査ができないかと模索する過程で、エチオピア南東部でイスラーム関連遺跡の調査のために考古学者を探していた大場千景さんと知り合った。

写真1（上）
インド西部グジャラート・ラタンプルにあるバーワー・ゴールの聖者廟（2011年／撮影＝遠藤仁）

写真2（下）
インド西部グジャラート地方に住むスィーディー（2011年／撮影＝遠藤仁）

その後、資金獲得や調査計画など数年模索し2023年にようやく調査が実現できた。初めての調査が順調すぎて、私が知りたかったスィーディーの出自や石製ビーズの生産、準貴石の産地の有無などに関しては未だ手つかずだが、中世にアビシニアからインドに渡来した多くはイスラーム教徒であったとされているので、同時期のイスラーム関連遺跡の調査は、私の個人的な興味に関しても道筋を示す可能性がある。今後発掘調査が実現できれば、石製ビーズに関しても何らかの情報を得られる可能性もある。ただし、調査の道中で見た人々が身につけているのはガラス製ビーズばかりで、発掘が行われた遺跡の出土品も石製ビーズは極めて限定的のようである。もしかしたら、中世アビシニアにおいて石製ビーズの流通や生産はそれほど盛んではなかったのかもしれない、とやや弱気な考えもよぎる。

学会員の方々は、エチオピアやその周辺の様々な知識を持っていると思う。もし、石製ビーズを好んで身につける集団や、石製ビーズ自体を生産する集団などの情報をご存じであれば、是非ご教示いただきたい。

活動紹介

異分野・異業種交流の効用

白鳥 清志　Kiyoshi SHIRATORI
アフリカ理解プロジェクト、アフリカ日本協議会、JICA 専門家

田中利和さん（事業構想大学院大学）より、本誌に「エチオピアへの理解を深める夕べ」を紹介してほしいと依頼がありました。田中さんとは 20 年以上の付き合いがあり、オロモ人コミュニティの暮らし、牛耕の技術文化、そして地下足袋ビジネスへの取り組み（Ethio-Tabi）など多くを学ばせてもらったご恩もあり、喜んで引き受けました。

「エチオピアへの理解を深める夕べ」は、2024 年 3 月に始まった緩やかな集まりです。エチオピアに関心のある方なら誰でも参加でき、研究者や開発ワーカーはもちろん、JICA 事務所や大使館関係者、国連、NGO、民間企業、旅行者まで、さまざまな立場の人たちが集まり交流する場です。

この企画は、エチオピア経験が豊富な北詰秋乃さん（JICA 専門家）、エチオピア研究者の松原加奈さん（東京理科大学）と雑談していて生まれました。松原さんから革靴工場の多民族で構成される労働者の話を聞き、「これはもっと多くの人が聞くべき」と意気投合したのがきっかけです。これまで、このネットワークに属する数名の研究者の方から、エチオピアの現状や文化について、多角的な視点から話してもらいました。北詰さんとは 15 年くらい前にも、分野横断的な勉強会を開催していたことがあり、その時にも話題を提供くださった研究者がおられるかと思います。

異分野・異業種の交流で、地域社会の複雑な課題や可能性を多面的に捉える契機となる「夕べ」が、参加者それぞれの実践に小さな変化をもたらし、分野横断的な知の組み合わせから、新たなアイデアや協働の芽が生まれることが期待されています。私自身、開発ワーカーとして地域の歴史や文化的背景への理解を技術開発や普及の前提と考えています。既成の解決策がなく、文脈に応じた知的生産と試行錯誤が開発ワーカーの仕事ですが、地域研究者の話からは、いつも「なるほど」と思わせる発見があります。一方で、研究者にとっても、実践で開発ワーカーが持つ複雑な技術的あるいは政治的課題の経験から得られる示唆は、研究による発見や解明の先にある可能性や課題、研究成果の地域とその住民にとっての意味を考えるきっかけを提供できるのではないでしょうか。こうした相互干渉は、どの分野・業種の組み合わせでも有効です。

写真 1
松原加奈さん「エチオピアの革靴工場で働く人びとを捉える」（2024 年 3 月 21 日 アディスアベバ上下水道公社無収水削減管理能力強化プロジェクト事務所にて／撮影＝北詰秋乃）

私は研究者に会うと、ほぼ間違いなく「その研究は何の役に立つのですか？」と尋ねるのが癖です。意地悪な質問ですが、疑問や違和感を率直にぶつけることで、次の一歩が見えてくることを何度も経験しています。1990 年代のタンザニアの灌漑農業プロジェクトでは、保健衛生の研究者と協働しました。

当初、JICA 内では「農業プロジェクトが保健衛生の課題を扱う必要はない」との意見もありましたが、紆余曲折の末、住血吸虫やマラリア対策が現地の農業研修所で実践されました。保健衛生の研究者や学生との交流は、農村の暮らしへの理解を深めてくれたのは言うまでもありません。我々も、研究者と学生には、実証と実践の境界や実践での課題を体感してもらえたと思っています。ところが最近、農業研修所のカリキュラムが削減されたと聞き、危機感を覚えています。JICA が推進するアフリカ稲作振興の共同体（CARD）でも、水系感染症対策を含むプロジェクトは見当たらず、従事する専門家の関心も薄いように感じられます。

写真 2
岡崎瑠美さん「アジスアベバの都市形成と建築遺産」（2024 年 9 月 4 日 JICA エチオピア事務所にて／撮影＝白鳥清志）

開発業界では、分野横断的・学際的アプローチの重要性が盛んに唱えられていたことがあり、最近は「共創」がキーワードの一つです。文科省や OECD も、学術と産学官民の越境的な場づくりを重視しています。重要な考え方であることは間違いありませんが、これまで試みられた総合開発プロジェクトや学際的アプローチが分野間の壁を抱えたままであったように、「共創」もその公的な枠組みが、形骸化や自由な発想の阻害を生み出さないかと危惧します。

まずは一人ひとりが異分野・異業種に興味を持ち、そこに新たな意義（楽しさとか面白さとか）を見出すことが大事と思います。「夕べ」を通じて、現場の実践者、研究者、企業関係者など多種多様な立場の人々が、エチオピア社会の「いま」を等身大の知と経験で交換し合う場が継続されることを願っています。そして、その交流から、それぞれに新たな視座が生まれれば幸いです。

編集者註
この取り組みに関する案内の送付や運営への参加を希望する方は、白鳥さんまで直接ご連絡ください（ kiyoshi.shiratori[at]africa-rikai.net ）。この取り組みは現在、白鳥さん、北詰さん、松原さんの 3 名が呼びかけ人となって運営されていますが、呼びかけ人仲間を募っているそうです。呼びかけ人仲間が増えれば「夕べ」が充実するし、またこの取り組みが長続きしてほしいからだそうです。

学会動向

2025 年度総会

2025 年 6 月 29 日（日）に、弘前大学で、日本ナイル・エチオピア学会 2025 年度総会が開催されました。議題は以下のとおりです。

議事

- 議長と書記の選出
- 2024 年度事業報告（案）について
- 2024 年度会計報告（案）及び会計監査報告
- 2025 年度事業計画（案）について
- 2025 年度予算（案）について
- 2026 年度（第 35 回）以降の学術大会の開催について
- 第 31 回高島賞の選考について
- JANES の ML で不着のアドレスについて
- 国際エチオピア学会について

2024 年度事業報告

1 公開シンポジウム「サニテーションと月経をめぐる課題の諸相－沈黙の殻をやぶり動き出した世界」2024 年 4 月 20 日（土）、ハイブリッド開催（実行委員：東洋大学）

2 第 33 回学術大会の開催
2024 年 4 月 21 日（日）、対面開催（大会実行委員：東洋大学）

3 第 30 回高島賞の授与
上村千春『恵みありて、インジェラに集う：エチオピア正教徒の食をめぐる生活誌』、春風社、2023 年

4 第 33 回学術大会最優秀発表賞の授与
大山修一、島田沢彦、タバレック・イスマイル「ジブチにおける乾燥地農業と廃棄物利用の可能性―下水の処理水と汚泥、ペットボトル、古着の農業利用―（口頭発表）」
遠藤仁・大場千景「エチオピア・オロミア州西ハラルゲ県における中世ハルラ関連遺跡の人類学的・考古学的調査（ポスター発表）」

5 学会誌の発行・編集
Nilo-Ethiopian Studies No.29 の編集・J-Stage への登載・オンデマンド印刷と発送（名誉会員とアフリカ・アジアの図書館）

6 ニュースレターの発行・編集
JANES ニュースレター No.32-1, No. 32-2 の編集・公開

7 会費請求
2024 年 6 月に請求書を送付

8 評議員選挙
2025 年 1 月 28 日に投票用紙の発送を行い、返送は 2 月 18 日とした。2 月 26 日に東京外国語大学において、石川博樹会員（選挙管理委員長）、大坪玲子会員（選挙管理委員）、若狭基道会員（選挙管理委員）により

開票作業が行われた。投票数 34 票、うち有効 33 票、無効 1 票であった。集計により、得票数上位 34 名が当選、35 人目については同投票数かつ入会年月日が同じ 2 名のうち 1 名を会長判断により当選とした。その後、事務局から当選通知と承諾書を送付し、 2 名から辞退の回答があった。そのため、同投票数を得た 1 名、および、それに次ぐ投票数の 1 名が繰り上げ当選となり、35 人の評議員が選出された。さらに、評議員会(6/28)において運営幹事 1 名が評議員にすることが承認された。

2025 年度事業計画案

1 第 34 回学術大会 2025 年 6 月 28 日（土）・29 日（日）、対面開催（大会実行委員：弘前大学）
2 第 31 回高島賞の選考
3 第 34 回学術大会最優秀発表賞の投票
4 学会誌の編集・刊行
Nilo-Ethiopian Studies No.30 の編集・J-Stage への登載・オンデマンド印刷と発送（名誉会員とアフリカ・アジアの図書館）
5 ニュースレターの発行・編集
JANES ニュースレター No.33-1, No. 33-2 の編集・公開
6 会費請求
2025 年 7 月に請求書を送付する

第 34 回学術大会

2025 年 6 月 28・29 日に、弘前大学にて、第 34 回学術大会が開催されました。最優秀発表賞には、遠藤仁さん・渡邊三津子さん・大場千景さんが選出されました。研究発表の演題と発表者は以下のとおりです（敬称略）。

- 宮地歌織・増田研「ケニア農村部おける高齢者のケアと移動について：クワレ・カウンティの事例より」
- 相原進「エチオピア国立劇場のダンサーにおけるキャリア形成とスキル構築に関する世代間比較」
- 元木春伽「エチオピア西南部ジンカ市における椅子の利用と座る姿勢」
- 三代川寛子「コプト正教会によるアフリカ宣教―アフリカの連帯？」
- 中村結友「エチオピア南西部ベンチ社会におけるプロテスタント系キリスト教の拡がり：迫害の語りに焦点を当てて」
- 加藤基「ススネヨス期前後のキリスト論の再検討：マズガバ・ハイマノートとマグセフ・アセッタトの比較から」
- 石原美奈子「行政文書を読み解く―ジンマ大学アーカイヴズ・センター（JUAC）の取り組み―」
- 吉田早悠里「ハイレセラシエ帝政期末期におけるエチオピア南西部の社会変容：W.Lange による 1972 ～ 1973 年の現地調査の記録から」
- 髙橋洋成「ハマル語・バンナ語の後置詞 =sa をめぐって：主題標識としての属格／所有格標識」

- 梅屋潔「『ウガンダ研修』ことはじめ：地域研究教育プログラムの来し方行く末」
- Ohsoon Yun, “After the Fieldwork: Reimagining Ethiopia through Coffee and Language”
- 田中利和「Ethio-Tabi の創造に関する実践的地域研究⑨：ウォリソにおける地下足袋製造の挫折」
- 石川博樹「ダボとアンバシャ：エチオピアのキリスト教徒の 2 種の小麦パンに関する歴史学研究」
- 遠藤仁・渡邊三津子・大場千景「エチオピア・オロミア州の中世サカテ遺跡の構成要素の検討―現地踏査および衛星画像分析から探る遺跡概要」

会員の異動

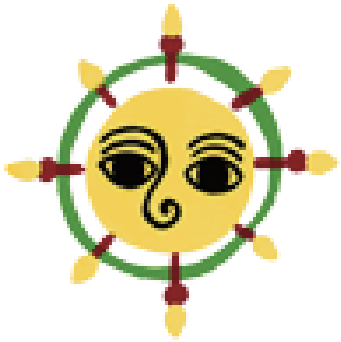
新規入会者（2025 年 10 月 20 日時点）

- ヒルポ・ビヤ（横浜国立大学・学生会員）
- 上野瞭太（東京大学大学院人文社会系研究科・学生会員）
- 三代川寛子（京都大学人間・環境学研究科・正会員）
- 林由華（岡山大学・正会員）
- Tadesse ADDISU MESERET（Department of Sociology and Social Anthropology, Addis Ababa University・正会員）
- Birhanu KASSAHUN YEMANE（Jinka University・正会員）

JANES ニュースレター No.33-1

配信日　2025 年 12 月 5 日
編集・配信　日本ナイル・エチオピア学会
編集委員　清水信宏、田中利和、下山花

表紙写真
アワサ湖の魚市場で、釣れた魚をさばく少年たち（2025 年／撮影＝下山花）



編集後記　今年度より、新たな編集体制でニュースレターを作成してまいります。会員のみなさまが何かしら愉しむことができる場にできればと思いますので、何卒ご協力のほどよろしくお願いします。今回ご寄稿いただいたみなさま、誠にありがとうございました。（清水信宏）